

印旛沼親水空間の活性化 —アクセスについての研究—

日本大学 学生会員 ○大関 祐次郎
日本大学 正会員 吉川 勝秀

1. 研究背景・目的

現在、千葉県印旛沼では水循環健全化会議の緊急行動計画によって行政・民間・住民が、健全な水循環の再生として、水質・治水・生態系・親水性の再生が行われている。しかし親水という面において具体的な計画はなされていない。

そこで本研究では親水性という面に着目し、現在ある親水拠点を最大限活用するために印旛沼へのアクセスの面から親水性の再生することを目的とした。

2. 調査項目

印旛沼周辺の印旛沼の水辺利用状況

印旛沼周辺の水辺の利用可能状況を水辺に『近づける』『見える』『見えない』と調査した。

周辺住宅地からの移動時間の現状

周辺住宅地周辺の駅から印旛沼までの移動手段別にかかる時間を以下に示す。電車とバス、乗用車の実際にかかる時間を調査した。

アンケートによる親水拠点利用者の調査

親水拠点に集まる人の住宅地から親水拠点への移動及び利用の実態調査のために、佐倉ふるさと広場に集まる人のアンケート調査を行った。

印旛沼の年間の利用者数を親水拠点の管理者からヒアリング調査を行った。

3. 調査結果

印旛沼周辺の現状調査結果

印旛沼周辺の水辺の利用可能状況を図-1に示した。

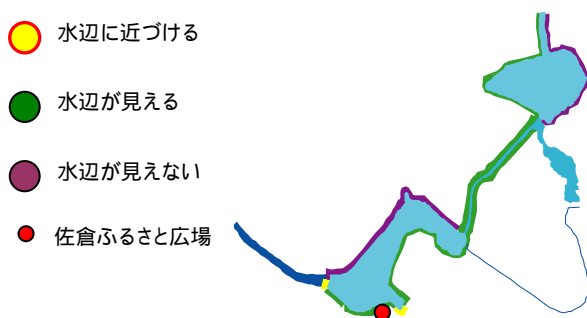


図-1 印旛沼の親水空間の現状

図-1から全体として周辺が田畑、休耕田や堤防などに阻まれるため、水に近づけるスペースが少ない。しかし、中にはボート乗り場・屋形船のサービスや水辺に近づける空間なども存在する。

周辺住宅地からの移動時間の現状

表-1 周辺住宅から印旛沼までの時間

エリア(駅名)	公共交通(分)	乗用車(分)
千葉ニュータウン	40	35
成田	20	45
京成臼井	15	5
京成佐倉	10	10
勝田台	25	25

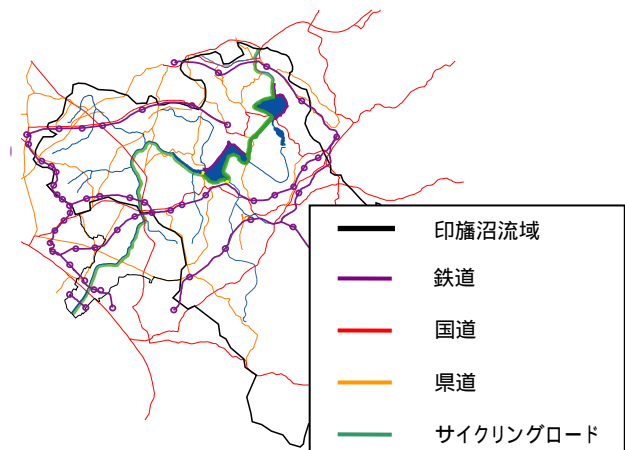


図-2 アクセスの手段

表-1より、佐倉・臼井など印旛沼の南側の住宅地からは短時間でアクセスができるが成田・千葉ニュータウンなど印旛沼の北側の住宅地からのアクセスは比較的時間がかかることがわかる。

アンケート調査結果

印旛沼で1番、人が集まる佐倉ふるさと広場を親水拠点としてアクセス・利用者の状況のアンケート行い結果を以下に示した。

図-3は利用者住居比率を示したものである。佐倉、臼井などの印旛沼南側住宅からの来客が多かった。ことに対し、千葉ニュータウンや成田などの北側の住宅地の来客は少ないことがわかる。

キーワード 親水空間、アクセス、再生、水辺利用、活性化

連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 日本大学理工学部 水環システム研究室 TEL/FAX047-469-5228

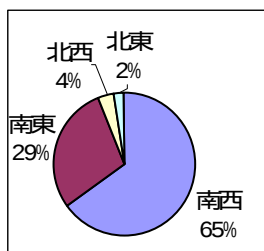


図 - 3 利用者住居比率

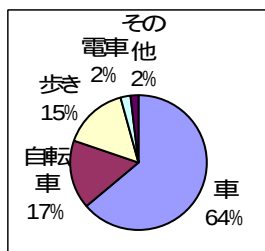


図 - 4 移動手段比率

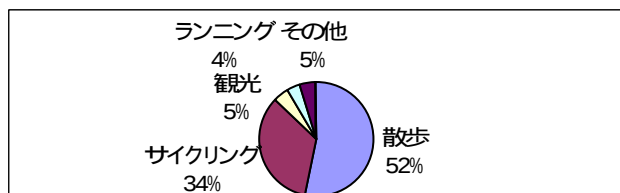


図 - 5 利用目的比率

図 - 4 は移動手段比率を示したものである。アクセス手段はほとんどが自動車で来ている人が多い、次いで徒歩・自転車で来た人が多かった。公共交通手段を利用した人は少ないことがわかる。

図 - 5 は利用目的の比率を表したものである。散歩・サイクリングの目的で来る人が8割以上であるということから運動目的で利用している人が多く、健康管理などの目的のためにサイクリングロードを利用していることが考えられる。

手段別利便性を知るために移動手段の利便性について集計した。

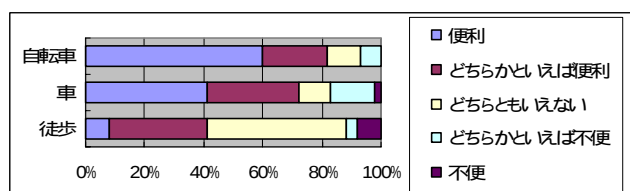


図 - 6 移動手段別利便性

図 - 6 は移動手段別利便性を示したものである。印旛沼に来ている人で不便であると思っている人は全体的に少ないことがわかる。また、自転車によるアクセスは便利であるとする意見の割合は非常に高く、利便性が高いといえる。

ヒアリング調査結果

親水拠点の管理者に利用者数についてヒアリング調査を行った。その結果を表 - 2 に示す。

表 - 2 平成16年度親水拠点広場利用者数 (人)

	チューリップ祭り(イベント)	レンタサイクル(毎日)	屋形船観光(祝日)
平成16年度合計	310000	3880	2950
1日平均	3444	11	76

佐倉ふるさと広場にはイベント時の利用者は非常に

多いが普段の利用者はそれほど多くないことがわかる。

4. 問題点とその対策

調査結果から問題点の提示と対策の検討をした。

印旛沼水辺利用調査から水辺に近づける空間が少ないという問題がある。対策として、水辺に近づける場所・親水拠点を増やす必要がある。そこで現在ある公園やサイクリングロード・甚平渡しなどの、観光資源を有効利用する必要がある。また自動車での利用が多いことから親水拠点には駐車場の整備も必要である。

千葉ニュータウンなどの北側からの利用者が少ない、その理由として、印旛沼までのアクセスが悪いという問題点がある。また、利用者の少ない千葉ニュータウンの周辺の水辺空間調査をしたところ、周辺には自然の水辺に接することができる場所がほとんどなかった。このことから周辺住民は水辺と親しむ機会が少ない、という問題点も考えられる。対策として利用者の少ない地域からの水辺に親しむ空間の整備とアクセス改善が必要と考えられる。対策を同時に満たす手段と自転車が便利であるというアンケート調査、また、サイクリングロードが健康増進、安全なネットワークなどの面から見直されている。水辺のサイクリングロードの整備などがある。

5. 結論

印旛沼の利用者はイベント時には数多く来る。一方、普段はイベント時と比べると少ないということから、普段の利用者数を増やす必要があると考えられる。

健康管理目的で利用している人が多く、移動手段は車・自転車・歩きがほとんどである。

佐倉、臼井などの印旛沼南側の住宅地の来客が多く、また移動時間も短くアクセスは便利である、それに対し千葉ニュータウンなどの北側の住宅地の来客は非常に少なく、アクセスも不便である。このことからアクセス改善は利用者の増加が見込め、活性化につながると考えられる。

印旛沼を利用する人が増えることによって印旛沼を知ってもらい、印旛沼を貴重な自然が残る場所としての意識を持ってもらうことは印旛沼自体の健全な水循環にもつながると考えられる。

参考文献

財団法人印旛沼環境基金：版印旛沼白書

pp.1-80 2004年11月